

## あとがき

### 大川 啓

大島は、気仙沼湾中央に位置する南北に細長い島です。その暮らしは海とともにあり、漁業を中心に、江戸時代には魚問屋や廻船業も営まれ、昭和期以降は養殖業が発展したほか、船員を多数輩出してきました。また、風光明媚で知られ、戦後は民宿や食堂などの観光業が成長しました。

海とともにある暮らし、その歴史を伝える重要な資料群の一つが、「大島漁業組合資料」です。100年以上の歴史を有する大島漁業協同組合では、創立以来の主要な文書を簿冊に綴じて保存してきました。最も古い『漁場ニ関スル文書綴』には、1875（明治8）年以降の文書が綴られています。2006（平成18）年には、この保存資料を活用して『大島漁業組合百年史』が刊行されました。その後、保存資料の整理をおこない、漁協事務所内に「大島漁協文庫」を設けて永久保存することを決めました。この文庫設置時に中心人物として尽力されたのが、元組合長で共同研究者の水上忠夫氏であり、保存資料の整理を担当されたのが、大島郷土史の第一人者で『大島漁業組合百年史』の主要な執筆者でもある、研究代表者の千葉勝衛氏です。

2011年3月の東日本大震災と津波は、大島の尊い人命を奪い、暮らしの基盤を破壊しました。漁協事務所も被災し、2階まで達した津波によって、「大島漁協文庫」や現用文書が水損しました。財団法人時代の1949（昭和24）年以来ご縁のあった、神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）は、水上氏ら漁協関係者の要請を受け、同年5月から被災資料の救出活動を開始します。5月13日から31日までの期間に、常民研所員・職員、教員・大学院生有志による10名前後の班を6班編制し（実際は5班で活動）、リレー方式で引き継ぎながら救出作業に取り組みました。2016年に常民研に着任した私からみると、そうした活動の背景には、常民研所員や研究者としての使命感だけでなく、「大島漁業組合資料」の収集・保存に代々尽力されてきた大島漁協と関係者の方々にたいする敬意があったのではないかと思います。

救出資料のうち写真資料以外は、奈良文化財研究所での真空凍結乾燥を終えて、2012年11月に大島に戻り、2015年9月には新築された大島漁協文庫に収められました。しかしながら、資料に付着した泥や埃、カビなどの除去、海水由来の塩分の除去といった大きな課題も残されており、2018年現在も、常民研所員や大学院生有志によって補修や整理作業が続けられています。同様に、真空凍結乾燥処理に不向きな写真資料も、常民研で預かって洗浄等の作業を続けています。

本報告は、千葉氏や水上氏ら大島の住民を中心とした共同研究メンバーが、そうした救出資料を活用して、大島における遠洋漁業の歴史的な変遷を明らかにしたものです。1995年の阪神淡路大震災以降、被災資料の保全活動が全国各地でおこなわれてきましたが、そうした活動の課題の一つとして、保全された資料の活用が指摘されています。本報告は、地元住民の方々が救出資料を活用した先駆的な事例としても大きな意義をもつことを強調しておきたいと思います。